全学共通科目のねらい

—都市教養プログラム—

都市教養学部人文・社会系社会学コース・教授
宮台　真司

【全体の中での都市プロの位置づけ】

前年度（平成19年度）の都市教養プログラム部会（教務委員会基礎教育部会のサブ部会）の司会を務めた、社会学分野の宮台真司です。都市教養プログラム［都市プロ］の概略を説明します。『履修の手引』に沿いながら、補足を加える形で進めたいと思います。

「都市プロ」の学則上の根拠は『手引』巻末の「首都大学東京都市教養学部規則（抄）」にある通りです。『手引』冒頭（P.3）の「授業科目体系」を参照しながら「規則」をお読みいただくと良いでしょう。今回はこれらをかみくだいてパラフレーズいたします。

2年生から始まる「専門教育科目群」の履修に先立ち、1年生から「都市教養科目群」「共通基礎教養科目群」を履修します。「都市教養科目群」は「情報科目・基礎ゼミ・実践英語・都市プロ」から成り立ちます。「都市プロ」がこれから説明するものです。

「情報科目」「基礎ゼミ」は1年生で2単位履修、「実践英語」は2年生までに各年4単位履修します。「都市プロ」は卒業までに14単位を履修します。（ちなみに「共通基礎教養科目群」は「未履修言語科目・保健体育科目・その他の教養科目・理工系基礎科目」）

都市教養科目群	情報科目
	基礎ゼミ
	実践英語
	都市プロ★
共通基礎教養科目群	未履修言語
	保健体育
	その他の教養科目
	理工系基礎科目

【都市プロの狙い】

都市プロは、4つの「テーマ」から1つを選び、4つの「提供学系」にわたって、選択科目（2単位ずつ）を履修する仕組になっています。それとは別に「現場体験型インターンシップ」（2単位）の選択科目があります。これらを合わせて14単位以上履修します。

都市教養科目群の必須26単位のうち14単位以上ですから、新たに誕生した首都大学東京の目玉になるプログラムだと言えます。それではこの都市プロがどんな目的をもったプログラムなのかを説明しましょう。『手引』の14頁「都市教養プログラム」をご覧ください。

そこにありますように、学問を「問題解決型／専門探究型」に分けるなら、都市プロは主要には「問題解決型」のプログラムで、2年生から始まる専門教育が「専門探求型」のプログラムです。これら2つを複合させるところに、都市プロの本来の目的があります。

噛み砕いていえば、専門以外の分野を広く学習することを奨励するとともに、ともすれば拡散しがちな一般教育（教養教育）を「大都市が抱える問題の解決」という焦点に関連づけることを狙っています。それが先の4テーマ・4学系という履修システムに表れます。

『手引』には「学際的アプローチ」という言葉がありますが、今日では「学際という分野」があるという考え方は廃れ、複数の専門的視座から検討することを意味する「トランス・ディシプリナリー」という概念が専らです。その意味でご理解くだされば幸いです。

【4テーマ・4学系の履修システム】

先の通り、4つのテーマ——①文化・芸術・歴史、②グローバル化・環境、③人間・情報、④産業・社会——から1つ選びます。①はリベラルアーツ的テーマ、②はカレントイシューズ的テーマ、③ヒューマンケア的テーマ、④ソーシャルデザイン的テーマです。

選んだ1テーマから4つの提供学系——(1)人文・社会系Ⅰ、(2)人文・社会系Ⅱ、(3)技術・自然系Ⅰ、(4)技術・自然系Ⅱ——にわたって科目を選びます。(1)は人文・社会系、(2)は法学系・経営学系、(3)は理工学系、(4)は都市環境学部、というのが概略の分類です。

こうした「テーマ×学系」スキームは、「1つのテーマについて、複数の専門的視座から眺める」というトランス・ディシプリナリーの発想にふさわしい独創的なものです。新1年生も、あるいは受験生も、この都市プロのスキームに、首都大らしさを感じるはずです。

ところが「テーマ×学系」スキームを運用してみて、幾つか問題があることが分かりました。15頁の「都市教

養プログラムの授業科目一覧」をご覧いただきながら、お話しします。現場体験型インターンシップは「テーマ＆学系」とは別枠なので、あとで別途説明します。

【履修システムが抱える問題点】

新しいシステムになって4年目。主に2つの問題があることが浮び上ってきました。1つは、学生にとって履修の縛りが強すぎて、語学や専門科目などとバッティングしやすく、それゆえに、履修のしやすさに所属学系間の格差が生じやすい、という大きな問題です。

もう1つは、「4テーマ×4学系」の16セルに収められた各科目名称にピンポイントのものが多く、担当教員が限定されがちなところに来て、各科目名称が学則レベルのものなので簡単に変更できないため、教員の退職やサバティカルで、開講が困難になる問題です。

後者の問題に関連して、非常勤による開講が許容されていないことが問題を大きくしています。素晴らしい目的をもったプログラムですが、総じて学生にとっても教員にとっても使い勝手が良くなく、結局開講できなくなりがちであるところに、問題があるわけです。

こうした問題に対処するためもあって、科目によっては複数のテーマにまたがってカテゴライズされています。4テーマの全てに該当する科目さえあります。受講しやすさの面で学生の便宜は上がりますが、4テーマという分類の意義が見失われがちになっています。

（なお、2008年9月現在、すでに経営教学戦略委員会において、都市教養プログラムの改革プランを検討しはじめている。ここに述べた問題点の全てが検討課題になっており、来年度からは一部が手直しされる予定である）

【現場体験型インターンシップについて】

次に、現場体験型インターンシップについて説明します。『手引』16頁をご覧ください。これは都市プロの中の選択科目ですが、先に説明した4テーマ・4学系から履修する他の選択科目群とは別枠になっており、4テーマ・4学系の履修システムに縛られません。

またこれは3年生から始まる専門教育科目のインターンシップとも別もので、1年生からとることができます。専門教育科目のインターンシップとは目的が別であることもあり、大学では1～2年生での履修を推奨しています（制度的には4年生まで履修可能）。

専門教育科目のインターンシップが「就職支援」を目的とするのに対し、都市プロ科目の現場体験型インターンシップは「社会性の涵養」を目的とします。簡単に言えば、卒業後に社会人として生きていくのに必要な「社会人としての自信」を習得するのが目的です。

私も現場体験型インターンシップ委員を務め、インターンシップの受け入れ先企業の聞き取り調査を何度もやりましたが、企業側からの声をきくと様々な問題があることが分かります。「平気で遅刻する」「嘘をつく」など言語同断のもの以外にも、幾つかあります。

私がよく伺った印象的な声は、「遅刻や欠勤の連絡を親がする」「ぼおっと立っているだけで周囲の人間たちの期待に反応できない」「まじめすぎて周囲に溶け込めない」などというもので、社会常識やコミュニケーションスキルの欠落を思わせるものが目立ちます。

現在の問題点をあげると、「就職支援」とは区別された「社会性の涵養」という現場体験型インターンシップの目的が、学生に周知されていないことがあります。1年生の都市文明講座（4月）に付随してガイダンスしていますが、やや手厚くした方が良いでしょう。

漫然とインターンシップの現場に出かける学生も少なくないので、学生たちの問題意識を焦点化するために、ガイダンスにおいては、昨年度に企業側から上がってきたクレームから抜粋して学生たちに告知することなどが必要だと思われます。私からの話は以上です。